

心の危機は、どこから来たか？

——どう打開するか

山中 康裕

※本稿は2010年2月6日、大阪市のエル・おおさかで行われた東洋哲学研究所主催の公開講演会の内容を編集部でまとめ、加筆していただいたものです。

1 心が「キレた」子どもたち

最近、社会の「心の危機」を強く感じます。

たとえば「子どもが変わった」「子どもがすぐキレる」などと言われます。

「KY」がわかりますか。「空気が読めない」ということでですね。そういう若い人が増えてきた。他人への配慮とか、気づかいとは無縁という人が多くなった。で

は、「草食系男子」は？ 最近の男の子はおとなしくて、

植物しか食べていないような感じだというんです。草

食系です。「腐女子^{ふじよし}」という言葉もありますね。「自己愛

症候群」も増えています。自分のことしかわからない。

自分のことしか考えない。たとえばアキバの事件（20

08年の秋葉原通り魔事件）なんて、ムシヤクシヤしたか

ら「誰でもよかった」という。こういう考えられないよ

うな事件が、いっぱい起こるようになりました。

しかも、それは一部の特殊な「異常者」だけの問題で

はありません。私は精神科医として、はつきり言えま

すが、それはすべての子どもに関わる問題なのです。

その「氷山の一角」として、さまざまな事件が起きていると考えています。

「この現状は一体何なのか」「何が原因か」「どう打開するか」ということを考えていくのが、きょうのテーマです。

はじめに要点を概略的に申し上げ、その後、ひとつひとつくわしくお話しいたします。

人間関係を分断した《情報革命》

心の危機はどこからきたか。端的に言って、「心がキレた」からだとは私は考えています。何からキレたのか。「大自然」からキレた。心と自然の関係性がキレてしまった。また「内的自然」からもキレた。生きている身体と心が切り離されてしまった。そして人と人との関係も希薄になり、キレかけています。

その背景には、「大幅な環境変化」がベースにあると考えています。地球環境が変わりました。私は1941年生まれで、今、68歳です。そういう人間から見ると、めちゃくちゃに変わりました。「クルマ中心の社会」に

なったし、環境破壊も大変です。住環境のみならず、あらゆる便利化、合理化。これには、いいこともたくさんありますが、しかし、その裏でとんでもないことがたくさん起こってきたわけです。

私をもっとも重要視するのは、情報事情の激変です。いわゆる《情報革命》です。

ラジオの放送が始まったのは、1925年（大正14年）です。「こちらは東京放送局であります」という第一声から始まりました。まだ、80数年しかたつていません。そう聞くと、若い人などは、びっくりするわけです。若い方々、今の学生などは、生まれたときにはもうテレビがあるわけですから、テレビさえ昔からあったと思ひ込んでしまう。

とんでもないことで、テレビの本放送は1953年（昭和28年）からです。まだ、ほんの57年前です。忘れもしません、私が小学校2年生のとき、「アメリカには、絵が見えるラジオがあるそうだ」という、うわさを聞きました。そして4年生になったとき、試験電波が入るようになり、うわさは本当だとわかりました。放送が

始まって、町の中で一軒だけテレビを買った家があります。そのテレビは当時、14インチで25万円。今だったら、250万円くらいでしょうか。その一軒の家に、みんなでテレビを見に出かけたものです。弁当を持って(笑)。力道山の空手チョップとかを見た覚えがあります。

ラジオが第1次《情報革命》、テレビが第2次《情報革命》とすると、第3次はパソコン・インターネット・携帯電話などのデジタル革命です。パソコンの普及開始が1983年(昭和58年)です。ちなみに、日本国民の半分以上が持つようになったのが2000年(平成12年)です。1994年(平成6年)ごろには携帯電話が普及し始めて、97年(平成9年)には、もう日本人の2人に1人は持っていました。

これはすごい情報革命です。便利になったことはいことだと、みなさん言われるかもしれませんが、必ずしもいいことだけではありません。パソコンや携帯電話がらみで、とんでもない犯罪も起きたではないですか。携帯で「死にたい人、集まれ」と自殺集団ができ

たり、「殺したい人、集まれ」と殺人集団ができたり、わけがわからないことがいっぱいあります。これは情報革命が大きな原因だと私は思っています。

実は、1997年の神戸の酒鬼薔薇聖斗事件(14才少年)、2000年の福岡バスジャック事件(17才少年)、2006年の京都宇治での塾講師(大学院生)による少女殺人事件(23才)——彼らはみな、1983年前後の生まれなのです。パソコンの普及開始の年です。非常に象徴的なことではないでしょうか。

「心のよりどころ」の喪失

第2に、価値観の変化が起こり、「心のよりどころ」がなくなると私は考えています。人生の目標とすべきもの、あるいは尊敬にあたいする理想像というものを、小学生・中学生に聞いても、答えには、立派な政治家とか、傑出した人格などは、ほとんど出てこない。今、坂本龍馬が人気で、もちろん私も龍馬は好きですが、ただ、もう坂本龍馬を超える新しいリーダー、政治家、指導者が出てくるべき時期なんです。なのに、そんな

百何十年前の人に期待をおつかぶせるようでは、なさけないです。

そして、宗教や教育への期待や関心も、非常に希薄化してきました。みなさまはそうではないわけですが、一般的には、そういうことにはまったく関心のない人が圧倒的です。哲学がありません。困った時代です。

「自然との接触」がなくなった

第3の原因として、自然との接触が切れてなくなりました。子どもたちが自然と接触することが、とみに減りました。

日本には緑の大自然があります。だから、われわれは自然というと、山があり、川があり、そういう安らぎの風景を思い浮かべますが、西洋、とくにキリスト教が生まれたシナイ半島あたりでは、自然というのは実に厳しい。シナイ半島に行つて、私は驚いたんですが、地面は乾き、干からびて、カチンカチンです。われわれは砂漠というと、「月の砂漠」という歌があるものですから、さらさらのきれいな砂の広がりを思いますが、

全然そんな甘いものではありません。「砂漠」ではなくて「沙漠」。「サンズイ」に「少ない」と書きます。水が少ないという意味です。砂はほんの少しだけで、ここに干からびた大地と岩です。山にも一木一草生えていない。ものすごく厳しい、苛烈な自然です。だから、ここでは自然といかに対決するか、いかに克服するかというのがテーマになる。

しかし、日本はありがたいことに、緑の自然があります。それなのに、その大自然と接触しなくなっているのです。

「身体Ⅱ内的自然」とも分離

第4に、身体との関係です。身体というのは「内的自然」です。「外的自然」というのが山とか川、そういうものです。なぜ「内的自然」と呼ぶか。たとえば、これは、かつては常識でしたが、身体の中を流れている血液の濃度、とくに塩分の濃度は、「外的自然」の海水の濃度と、ほぼ同じです。点滴などに使うリンゲル液と一緒になんです。

この「内的自然」というものの声を、われわれは、ほとんど聞けなくなつてしまった。身体との関係性が切れてしまったというのが私の見方です。

「生きられる身体」ということを、ドイツのツット(Zitt *Zeit* / 1893-1980) という学者が言いました。ドイツ語で「グレープター・ライプ (Grape-Lie) 」といいます。それに対して「対象化された身体」があります。物体としての身体ですね。これはケルパー (Kölper) といいます。要するに、体重が何キロで、身長が何センチで、走る能力が何々でという数字になつてしまった身体です。「3キロ減つたら同窓会に出よう」とか(笑い)。この「モノとしての身体」という捉えかたが、今ほとんど、増えている。身体が「生きられる身体」ではなくなっています。パラケルススという16世紀の医学者も言っています。人間はミクロコスモス(小宇宙)なんです。マクロコスモスは、大宇宙です。きょうはよく晴れていますから、オリオン座も見えますでしょう。蒼穹の昴も見えるでしょう。そういう大宇宙と、人間という小宇宙が対応しているという思想ですね。

たとえば、自分の身体の中を「ナノ (Nano)」の単位で見ると。ナノは「10のマイナス9乗」ですから、10億分の1ですね。この超ミクロの眼で見れば、赤血球は巨大な円盤です。それが無数に渦を巻いて、動いている。それがわたしたちの身体です。身体そのものが宇宙なんです。この内的宇宙と外的宇宙が照応している、呼応している。これが、私の準拠しているユングなんかも考えていた宇宙論でありまして、宇宙は外側だけではなくて内側にもあるということです。

その「内的自然」との関係性が弱まり、キレかけているのです。「身体が生きられていない」ということです。身長とか体重、能力など、数字データ化でき、比較できる身体だけが関心の的になってきました。

自分のことになりましたが、去年の年末に、大腸がんを患いました。それを実は、自分で発見したんです。内科医のところに行つて、診てほしいと言つたんですが、「何か症状はありますか」と言うので、「いや何もありません。ただ、何か身体から叫びが聞こえる気がするんです。3日前から、眠りが浅くなったことくら

いで、食欲も別に変わったわけではないんですが、大

腸のあたりが何か訴えている。ちよつと診てもらえませんか」。すると医師は「そんなことで調べることはないですよ。過剰診療になつても困りますしね」と、そう言

いながらも、内視鏡で見てくれた。すると、がんだったんです。悪性度の高いポリープを取つてもらいました。「よく自分で見つけましたね！」と、ほめられました。

この「事件」を私の友人の東大の医師に手紙で知らせますと、返事が来て「先生と同じように、無症状なのに自分で見つけた人が、もう一人います」と。それは梅原猛先生なんだそうです。先生も、なにか変な声が聞こえるからと診てもらつたのだと聞きました。私は何も、梅原先生のような偉い方と自分を並べようというのではなくて、身体には「生きられる身体」というものがあるのに、それを多くの人は忘れているということを言いたいのです。

2 「人と人」「人と自然」とがキレた

ここまでで申し上げたことを、少しずつ整理してお話

しいたします。

パソコンと車で「閉鎖空間」が増加

まず《情報革命》について。この革命のはじめ、ラジオは「新しい囲炉裏」として「新しい楽しみ」を与えてくれました。NHK誕生のころの、各地の「ふるさと」を紹介する番組などは、どれを聞いても、心がほっこりしたものです。

ラジオドラマ「鐘の鳴る丘」（昭和22年〜25年）もありました。へ緑の丘の赤い屋根 とんがり帽子の時計台 鐘が鳴ります キンコンカン……という歌で有名ですね。これは、戦争で両親を失った孤児たちのために建てられた養護施設の物語なんです。当時のラジオは、人の織り成すいろいろな人生のドラマを、いっぱい伝えてくれました。「新しい囲炉裏」でした。

囲炉裏には火が燃えています。外は雪がしんしんと降って寒いけれども、囲炉裏には暖かい火がある。そこに、みなが寄って来て、話している。ラジオも、またテレビも、はじめのころは「新しい囲炉裏」でした。

弁当を持って、力道山を見に集まっていたところは。

しかし、今は、もう変わりました。

パソコンになると、もう「囲炉裏」とは正反対です。自分だけの世界です。人々から関係性を奪いました。どんどん個別化して、つながりを奪ってしまった。

そういうと「携帯電話は、人をつないだではないですか」と言われる。しかし、私は、携帯による関係性は、本当の関係性だとは思っていません。なぜかと言ったら、ボタンを押しただけで、すっと切れてしまうからです。余韻がない。人と人との関係性というのは、余裕と余韻がなければいけません。しかし、携帯電話は、自分の意思で、気に入らないと切ってしまう。反対に、一方的に、かけることもできる。これは、本来の人と人との関係性とは違うものです。

私は「昔はよかった」とは言いたくありません。昔は昔で、苦しかったです。食糧も乏しかったですし、いろんなことで悲しいことがいっぱいありました。しかし、人間関係は、もつとこまやかでした。

私の子どものころは、近くに駄菓子屋がありました。

古本屋がありました、貸し本屋がありました。質屋がありました。駄菓子屋で、センベイを買って、みなかべって、という良き時代でした。

今、そういう小売店は、ほとんどありません。どこへ行ってもスーパーです。しかも、外資系のスーパーが席卷しています。そして、スーパーが増えるにしたがつて、遠いから車で行かなければならないということになりました。おじいちゃん・おばあちゃんは困りますね。ますます「クルマ社会」になってきた。近くの駄菓子屋や文房具屋、古本屋でだべったり、楽しんだりという時間は、まったく消えました。

私の小さかったころ、一般家庭の夢は「三種の神器」でした。電気洗濯機、電気冷蔵庫、テレビです。今は、まず、どこの家庭にもありますね。それから「3C」時代になりました。三つのCはカラーテレビ、クーラー、そしてカー（車）です。

車というのは閉鎖空間です。そこでは、自分だけが帝王であり、王様です。自分が帝王ですから、誰にも、かしくきません。気配りする必要がない。一方、車の

中はどんどん便利で快適になってきた。エアコンはきいているし、音楽は聴こえるし、一人での世界が広がっています。他者とのコミュニケーションが、どんどん減っていつています。人との関係が減って、車に代わされる機械やモノにのみ関心がいきます。人間が、ますます横着になり、横暴になります。

コンピューターと車、これが、現在人の心を蝕んだ最大の元凶だと私は思います。

しかも、車の増加に伴って、環境破壊が起ります。道路は整備され、ますます遠方に出かけるようになります。高速道路を無料化したら、ますますCO₂が増えるでしょう。その上、道路を造ることを優先させて、ますます需要の上があった電気の供給のためにダムが必要となり、自然が破壊されていきます。いまは、そういう危険への認識が少し高まったようですが。

田中角栄内閣の「日本列島改造論」のように、「速いことはいいことだ、大きいことはいいことだ」という考えで、どんどん進み、便利がいい、合理化がいいと、余分なもの、すき間、空き地、ゆとりのたぐいが削られ

ていきました。そうした発展が「進歩」として称揚され、経済優先主義が幅をきかせるようになってきました。

「時間どろぼう」にねらわれた社会

個人も人間関係も、どんどんゆとりや無駄をなくしていくということが優先されています。

ミヒヤエル・エンデというドイツの作家が、『モモ』という傑作を、すでに30年以上も前に書いています（1973年）。モモというのは女の子の名前です。孤児です。住んでいる場所は、はつきり示されていませんが、どうもローマのような古い都市のようです。そこに、半分壊れた円形劇場の廃墟があり、モモはここに住んでいるのです。

モモというのは、すごい子であります。どういふところがすごいかというと、「耳をかたむける」力をもっている。つまり、みんなの話を、それはそれは熱心に聞きます。

くわしくは本で読んでもらうことにして、私流に紹介しますと、たとえば私が床屋のおっさんだとします。

「おお、モモちゃん。きょうは俺は頭にきて、しょうがないんだ」「どうしたの?」「けんかしたんだよ!」。そして、わーわー、かみさんの悪口なんかを言う。30分ぐらいしゃべっているうちに、「おお、すつきりしてきた。モモちゃん、ありがとな」と帰っていくわけです。モモちゃんは、その間、目を、きらきら輝かせて話を聞いているだけです。いまでいうカウンセラーの仕事をやっているわけです。

彼女は学校で学んでいません。だから、「モモちゃん、年いくつ?」と聞かれても、「わかんない。ひよつとして百歳」とか言うわけです。「えっ、百歳のわけないだろう」と言うと、「じゃ、ゼロ歳」。数もちゃんと数えられないくらい無教育なのです。しかし、すぐに近所の人にとって「なくてはならない存在」になります。

みんながモモちゃんに話を聞いてほしくて、やって来ます。大工のおじさんも来るし、飲み屋のおっさんも来るし、そのへんのおばさんも来る。そしてたとえ「モモちゃん、きょうは気分悪いから、ここにおらせてもらってええか」「ええよ」と。そして、じっと顔を見

て「おっちゃん、どないしたん?」。こうして、モモちゃんのところに行くとき、おばちゃんもおじちゃんも、心がほっこりしてくる。

このモモの宿敵は「灰色の男たち」です。彼らは「時間どろぼう」なんです。たとえば床屋に来て、灰色の男は、時間を節約しろと言うわけです。

「仕事をさっさとやって、よけいなことはすつかりやめちまうんですよ。ひとりのお客に一時間もかけないで、十五分ですます。むだなおしゃべりはやめる。年寄りのお母さんとすごす時間は半分にする」「役立たずのボタンインコを飼うのなんか、おやめなさい!」「寝る前に十五分もその日のことを考えるのもやめる。とりわけ、歌だの本だの、ましていわゆる友達づきあいだのに、貴重な時間をこんなにつかうのはいけませんね」(大島かおり訳)

要するに、無駄だとか、余分だとか何とか全部省かせて、「時間銀行」に貯金させるんです。貯蓄だから、自分が得するように思いますが、気がついてみると、余裕がまったくなくなっているわけです。あくせくす

るばかりで、楽しくもないし、みんな、とげとげしくなってくる。時間を節約しているはずなのに、かえって毎日がせわしくなく、速く過ぎ去ってしまう。

考えてみますと、床屋さんへ行つて一番楽しかったのは何かというと、だべることでしよう。そうじゃありませんか？　そういう余分なことを全部省略させてしまふのが、灰色の男たちの陰謀です。その結果、毎日が寒々とした生活になっていきます。そしてだんだん、きつきつしてきます。なんのために忙しい思いをしているのか、みなわからなくなってくる。怒りつぱくなったり、心がすさみ、冷え切つて、憂鬱になつてくる。

こういう「時間どろぼう」の陰謀と戦うのが、モモちゃんです。盗まれた時間を取り戻してくれるのです。

この話は、私がドイツに留学しているときに読みました。エンデが(95年に)亡くなった後、中村雄二郎さんと私と池内紀さんと3人で岩波書店の「図書」で、てい談もやりました(96年9月号)。

現代人の必読書だと思えます。

50年、百年先を見ずえて

次に、「心のよりどころ」の話です。

私がつくづく思うのは、多くの子どもたちが「人生の目標」をもっていないということです。

明治時代だと「私は大臣になります」「私は大将になります」とか、「大人になったら何々になりたい」という大きな目標がありました。もちろん、大臣や大将だけが目標にされる時代というのは危ないです。富国強兵の時代ですから。

それはそれとして、いつのころからか、博士も大臣も社長も眼中になくなりまして、いま聞くと、タレントとか、いわゆるテレビに出ている「有名人」、そういう人たちが目標みたいになっている。私は別に、そういう「有名人」をバカにするつもりはまったくありません。彼らの存在は、それなりに意味があると思つています。しかし、「有名」だから中身があるか、立派な人かという点、それは全然、違います。ごまかされたらだめです。

要するに、人生の大目標が、どんどん消えていって、

軽薄化してしまった。模範とする理想像や傑出した人格が消えました。たとえば、政治家でも天下国家を論じ、50年先、百年先を考える大物がいません。50年先、百年先に、この国をどうするかというテーゼ、信念を自分の中にもっていかなかったら、政治家なんかやめると言いたいくらいです。

一つの例を挙げましょうか。私は中学生のころ、徳川家康は大嫌いでした。「タヌキ親父」だと思って。ところが、「カワンセラー」になってみて、徳川家康というのはすごかったと思いました。

「カワンセラー」というのは、今の私の肩書です。京大を定年退任してから始めました。後でまた紹介しますが、川との触れ合いを通して人間の心を育てようという活動をしています。名刺屋さんに頼んだら、「先生、字が間違っていましたので直しておきました」って、「カワンセラー」にしてきた（笑）。そうじゃないんです。「カ」の後は「ワ」なんです。

徳川家康ですが、関東には利根川という大きな川があります。江戸時代より前には、利根川は荒川と合流

して東京湾に注いでいました。だから百年に3回ほど、洪水が起きました。百年に3回の洪水というのは大変なことです。江戸というのは、あの時代、世界で唯一の百万人都市です。1回、洪水が起けると、そのうちの60万人が水害の被災者となったといわれる。どれだけ犠牲が出るか、どれだけ費用が要るか。

そこで家康は、利根川の流れを変えて、房総半島へもっていった。銚子で太平洋に注ぐように変えたのです。こうして、百年に3回の洪水を未然に防ぎました。単純計算すれば、260年間で8回の洪水を防いだことになります。これは、すごいことなんです。これをやったのが家康です。

また、ここに来る途中、土佐堀川と淀川本川を見てください。きれいに整備されていて、びっくりしましたが、実は江戸時代までは、このあたりに淀川と大和川との合流点があったんです。大阪城の北側ですね。

ちなみに大和川というのは、何10年前、日本の汚い川の「ワーストワン」——「最も汚い1級河川」として槍玉に上がりましたが、その後の努力で、いまは他の

川との差はほとんどありません。

この大和川が、かつて大阪城の近くで淀川と合流していた。それでたびたび洪水が来る。それを防ぐために、どうしたかというところまで、大和川をもつて行った。「大和川付け替え工事」です。今から3百年前です（1704年）。堺市から西へ流れて大阪湾に注ぐようにした。それをやったのも徳川幕府です。

また、名古屋では、木曾川と揖斐川と長良川の三つが集まって、伊勢湾に入っています。名古屋は尾張藩です。徳川御三家の筆頭。だから、治水工事の際、堤防を尾張側だけ3尺高くしました。つまり、美濃（岐阜南部）および三重県側は約1メートル、堤防が低い。その結果が実は、何百年もたつて、如実に出ました。昭和34年9月26日の伊勢湾台風です。あのときに大洪水が起りましたが、降った雨が岐阜側と三重側に流れてしまい、それが一因となって、名古屋港から数10キロ北上がった墨俣町（現在・岐阜県大垣市）一帯などは水没してしまつたのです。そう見れば、あれは自然災害ではなくて人工災害です。

ですから、政治家は、百年後、2百年後にどうなるかを見越して行動しなければなりません。

吉田松陰が亡くなったのは何歳か、ご存じですか？「安政の大獄」で殺されましたが、処刑されたのは満29歳ですよ。驚くでしょう。あのころ、10代、20代で、日本をどうすべきかを真剣に考えていたんです。

津田梅子——津田塾大学を創つた人ですが、アメリカに渡つたのが6歳です。明治4年です。あのころの人たちは、先の先まで考えて、これからの日本が世界に伍していくのであれば、英語が話せなければだめだというので、女性も留学させたわけです。

ちなみに、津田塾の卒業生の中で、私が尊敬する人は、神谷美恵子先生です。精神科医で、長島愛生園のハンセン病患者に尽くしたことで有名ですが、さまざまな方面で陰の支えになっておられる。戦後すぐ、お父さんの前田多門氏が文部大臣になつたので、その秘書も務めておられます。占領下であり、GHQ（連合国総司令部）との交渉や、文書の翻訳もされています。アメリカをはじめ各国のお歴々が、大臣にすごい圧力をかけて

くるわけです。それを全部、見事に翻訳したうえで、「お父様、相手は表向きは、こう文書で言っています。でも、本当の意味はこれですからね」と訴えることができた。だから、彼女は次の文部大臣(安倍能成氏)のときも要請されて、仕事を手伝っています。こうして、占領軍からの干渉を最低限に防いだわけです。政治の裏舞台で重要な仕事をした。目に見えないところで奮闘されています。

私は、そういう人たちが大事だと思っています。表舞台に出ているれば、目立つから、だれでもわかります。しかし、たとえば中国だったら周恩来総理とか、そういう人たちが歴史の陰で、すごく大きな役目を果たしているわけです。

一方、いまのテレビは軽薄なものばかりがはびこって、ちゃらちゃらと動き回り、真剣な議論をするような姿勢は非常に少なくなりました。真面目な討論などは、あつたとしても、ほとんど見られていません。

そのうえ、これまで尊敬されていた職種の人たち、あるいは企業が、どんどん悪事を露呈しています。脱

税とか、着服とか、そんな話ばかりです。結局、偉いように見える人たちが陰で悪いことをしているということがわかってきた。

一番よくないのは、これを見て、小学生や中学生が「僕らは別に、偉くならなくてもいいよ。出世したって、ちつとも善いことしてないんやから」と言う。その言いはわかりますが、ただ、それで何もかも否定して、自分が努力しなくなる。50年後、百年後の日本をどうするかという志など、誰ももたなくなる。こうなったら、もつとマイナスです。そうでしょう。そこが大事です。それを、みなさん方と一緒に考えたいのです。

空洞化する教育・宗教

では、もつとも「心のよりどころ」となるべき宗教や哲学や教育はどうか。

人々は人生の目的がわからず、「根源的な不安」に陥って、宗教に期待しました。しかし大部分は、期待を大きく裏切りました。

なかでもオウム真理教の事件は影響が大きかったで

すね。私の京大での教え子も何人も入りました。「何で入ったのか」と聞いてみると、まことしやかに科学用語を使って説明します。宗教の言説と現代の科学の論理を、見事に結びつける。もちろん、これは表面だけの結びつけであって、内実は都合よくツギハギしただけのものです。しかし、それだけで若者は引きつけられたわけです。

本来、安易に科学用語を使って説明するだけではなくて、宗教・哲学と科学と、その両方を統合する方向で、きちんと検証すべきなんです。そのうえで、現代に通じる言葉で説かないと、若い人を本当に引きつけることはできません。

教育についてですが、実は教育だけが貧乏人がの上がる唯一の道でした。私も貧乏人の息子でしたから、わかります。そこから「教育への過剰期待」が白熱しました。私は、京大の教育学部長までやりましたから、人から見れば華やかな表街道を来たように見えるでしょうが、勉強は大変でした。倍率30倍とかの愛知芸芸大学付属名古屋中学校に運よく入りましたが。

いま韓国でも「教育の過剰期待」は、日本の比ではないですね。韓国の受験戦争は、日本とは比べられないくらい熾烈です。

しかし、日本でこれだけ教育が白熱しているようで、実は真の意味での「教養や哲学」は軽んじられています。かつて教養はドイツ語で「ビルドゥング(Bildung)」と言われましたが、これには「人格形成」とか「人格陶冶とうや」という意味があります。こういう、「人間をつくる」という教育がなくなつて、「技術的なもの」や「表面的なもの」だけが幅をきかせています。ほとんどの大学から「教養部(教養課程)」が消えたことが、ひとつの象徴だと思います。

京大ですら——京大を特別視するつもりは、まったくありませんが——私は毎年、2百人くらいの学生相手の講義をやっていましたが、たとえば「ドストエフスキーの『罪と罰』を読んだ人、手を挙げてくれますか?」と聞いて、手を挙げるのは3人くらいです。私が中学校から高校にかけて読んだような本を読んでいる学生は、ほとんどいません。何もドストエフスキーを読ま

なきやいけないとは言いませんが、かつては誰に言われなくても、教養のベースというものがありませんでした。それがなくなっているわけです。教育の中核が、どんな抜け落ち、空洞化しています。

親自身が「生き生きと」生きよ

そして、私が一番言いたいのは、「親自身が生き生きと生きていない」ということです。それでいて、子どもだけに「勉強しなさい」という。

ある男の子の例ですが、彼が学校の先生に「なぜ勉強しなければいけないんですか」と聞いた。すると「いい大学に入るためだよ」と。「いい大学に入ってどうするんですか」「いい会社に入るんだよ」。そうやってずっと聞いていって、彼が出した結論は「そんなら、いい大学なんか行きたくない。うちの親父のようにはなりたくない。はじめから好きなことをしたほうがいい」と。彼のお父さんは東大を出て、大会社に勤めていました。しかし、お父さんは、スマイルの花がどこに咲いているかも知らない。すぐ隣の家に咲いていても、見向きも

せずに、自動車でバーツと通り過ぎてしまう。そんな生きかた。こんな大人になるんだったら、勉強してもしかたがない——と。そういう気持ちになる。こう言うんです。子どもは親を見ている。

今、日本人の寿命は延びました。

へ村の渡しの船頭さんはことし六十のおじいさん年はとつてもお船をこぐ時は元氣一ぱい櫓がしなる……

こういう歌がありますね。これは私が6歳のときに覚えたんですが、60歳というのは、そのときの自分の年の10倍ですし、すぐく年寄りに思いました。堺屋太一さんが日本経済新聞に連載した小説「世界を創った男チンギス・ハン」での説によると、昔の人の年齢を「1・2倍して3を足したぐらい」が今の人の年齢相応になるそうです。船頭さんに当てはめると、60歳というのはいまの75歳ですね。それでも、毎日、生き生きと働いていた。

余談ですが、私が50歳になったときに何を思ったかというと、「ああ、夏目漱石大先生より長く生きてしま

った！」ということ。漱石先生は49歳と10カ月で亡くなっていますから。明治以降の日本で、初めて本格的な心理小説、今の小説の原型を作った方で、今でも通用する小説を書きました。彼自身は神経症にとっても苦しんだわけですが、実は、漱石は私の精神的支柱の一人です。ちなみに、アメリカなんかに行きますと、よく「傑出した日本人3人を挙げてほしい」などと聞かれます。漱石のほかにも、私が挙げるのは、聖徳太子。亡くなったのは49歳とされています。そして芭蕉。彼は51歳といます。

「人生50年の時代」が長かったんです。それがいつの間にか、いまや平均寿命が83歳くらい（男女の平均が82・7歳）ですよ！ 百歳を超えている人が4万人いるということです。昔の人生より50年も多い。

ところが、その延びた寿命で何をやっているか。年金を心配しながら（笑）、ただ食って寝ているだけであれば、何のために生きているのか。何のための長さか。

お父さん方も、会社から帰って、本を読むのでもなく、

テレビのチャンネルをガチャガチャ変えながら、お酒を飲んで、寝てしまう。それで子どもにも頑張れと、いつても通じません。親自身が生き生きと生きていないと。

「うちの子は何にも頑張らない」という。「では、お母さん、あなたは一体、何のために生きているんですか」と聞いたら、「息子のために生きています」。そんなことを言うから、息子はイヤになって、人生の目標や《意味》がわからなくなっていくんですよ。

お母さんはお母さんの、お父さんはお父さんの、お兄さんはお兄さんのしたいことをやっている、それぞれが生き生きと生きている。そうならなければだめです。

要するに、子どもに「生き生きとした人生」の手法を示すことなく、塾に行かせ、競争を押しつけ、真に必要な「遊び」を奪って、勉強だけに重きを置けばいいと思っっている。その結果、子どもを「無気力」にしてしまったのです。

3 心の「キレ」を「つなぐ」ために

子どもには「遊び」が大事なんです。遊びといっても、ゲームをやったり、バイクを飛ばしたり、それだけならば、それは機械に逃げているのであって、遊んでいるといふよりも、むしろ機械に遊ばれている。そう言うていいでしょう。自分が主体性をもっていない。自分が主体になってやるのが「遊び」です。

「川は危ないから行くな」だけでよいのか

このへんから「自然との接触」の話になるわけですが、かつて、山も川も海も原っぱも、みな「遊び場」でした。道路だって「遊び場」だったんです。道路で野球や相撲をしました。三角の線を引くだけで三角ベースになり、丸く引けば土俵になった。今、そんなことをしたら、自動車にひかれてしまいます。

だから「危ない」というのは事実です。事実だけれど、では「危なくしたのは誰なのか」。そして「危ない状態から、どうやって子どもの遊び場を守るのか」。そういう

発想がなくて、ただ「遊んではいけません」とやっている。

子どもから「遊び場」を奪い、その一方で、極彩色の何とかパークとか、何とかランドとか、お金のかかる「遊び場」には、遠くからみんなで押し寄せる。すぐ近所の自然からは切り離しておいて、大変な出費と時間をかけて「遊ぶ」。どこかおかしくありませんか。何かに踊らされているではありませんか。

昔、川も「遊び場」でした。ザリガニを捕ったり、魚を釣ったり、泳いだり、船遊びに興じたりしました。蛭狩りもありました。石投げもやりました。

しかし、このごろ学校などに呼ばれて講演に行ったりしますが、「危ないので川には行かないようにしましょう」と教えているわけです。実際、川に行ってみると、「水辺で遊ぶな」などの禁止標識。綱が張ってあったり、川のそばまで行く道を巧みに遮断してあったりして、入れないようになっていきます。川と接触できません。

もちろん、川には危険もあります。神戸の都賀川水難事故（2008年7月）が一つの象徴ですね。あの都賀

川というのは、神戸市が非常に力を入れて、市民が川に親しめるような形で設計し、親水公園などの施設を造っていました。場所は六甲山の麓です。あのときは、上流に「1時間換算で144ミリ(10分間に24ミリ)」という、ものすごい豪雨が降りました。その水が一気に事故現場まで押し寄せて、またたく間に1メートル以上も水位が上がりました。川の周辺にいた人たちのうち16人が流されて、結局、子どもを含む5人の方が亡くなりました。そういう悲劇がありました。

これについては、いろいろ申し上げるべきことがあります。ですが、やはり、「今、上流で雨が降っている。どのくらいの雨なのか」、そういうことを知っておく必要があります。昔の人は、上流で何が起こっているかは、空を見たらわかりました。空を見ると、そっちのほうに黒雲が渦を巻いている。「これは絶対に危ないから、川には出ないでおこう」とか判断した。漁師さんなんかは、風をスツと見ただけで、「この風だったら、きょうは漁に出ない」と。出たら、船は木っ端微塵になりますから。昔の人は、きちつと風の具合、雨の具合、雲の

具合を読んでいた。

ところが、今の人は全然読めません。「自分の町の天気」まで、テレビやパソコンに教えてもらおうとしている。そんなものを、空を見たらわかるじゃないですか(笑い)。空を見るといっても、東の空を見たら意味ないですよ。西の空を見なければだめです。西から東へと天気は変わるわけですから。3時間後にどうなるかは、空を見ただけでわかります。そういう知識や経験がまったくなかった。そこが問題点です。それでいて、ただ「危ないから」と、子どもを川から遠ざける。

「見る自然」と「触れる自然」は違う

自然といっても、「見る自然」と「触れる自然」とは違うわけです。見るのは、みんな見ています。しかし、触れていない。いつの間にか、自然は「見る自然」だけになってしまった。自然は絵のように「見るもの、鑑賞するもの」に変わってしまいました。違うんです。本来、自然というのは「触れたり、働きかけたり、探索したり、冒険したりする」ものなんです。

私の恩師・河合隼雄先生のお兄さんである河合雅雄先生。日本モンキーセンターや、京都大学の霊長類研究所の所長をやっておられました。アフリカに出かけて、ゲラダヒヒの研究をなさった方です。

河合さんの話は面白いんです。「山中さん、サルも嘘つきまっせ」「先生、サル語がわかるようになったんですか」「いやあ、わしゃあ、サル語はわからんけどな、観察してるとわかるねん」とおっしゃる。というのは、サルには必ずボスがいます。そして、次ボスつぎボスがいます。

これは次期ボスの候補だけれど、ボスになれるかどうか分からない。あるところで、そういう次ボスが3頭いた。そのうちの1頭がどうも現体制に満足していない(笑い)。それで、彼はボスに意地悪するんです。ボスが毎日見回りする道に、わざとウンチをしておく。ボスはきれい好きで、それを見て、かんかん怒って、木をバーツと揺する。犯人の次ボスに向かって、「おまえか！」と怒鳴ると、次ボスはあわてて、全然違うサルを指さす(笑い)。サルも嘘をつくんです。これは河合先生から聞いた話です。生きた自然の姿です。

そういう生きている自然に触れていく——「触れる自然」が本来の自然でした。川でいえば、どこが深いのか、どこが水の流れが速いのか、どこが淵がこわいか、どのあたりが足をとられるのか。全部、知ってました。だから、危ないところには近づきません。ところが、今は何にも知らないから、飛び込むようになったら、どこにでもボーンと飛び込む。当然、事故も起きる。そうすると責任問題ですから、学校も市町村も「危険だから、川には行かないように」と教えます。

先日、ある地域で講演してきました。その地の川をきれいにしようという運動がありました。小学生から高校生まで集まって表彰されたのです。川についてのポスターや作文、詩、俳句などによって、運動をアピールしたということで表彰されたのですが、父母や関係者も含めて2百人ほど集まった。もちろん素晴らし運動です。ただ、私が「君たちのなかで、この1年間で、川に入った人は？」と聞くと、なんと1人しかいないんです。「魚を捕ったことがある人は？」。これは3人です。これが現状です。とても立派な作品を作っているのに、

言葉だけ、イメージだけが先行していて、体験が抜きになっていくのです。これがいまの日本のすべてにわたっての傾向です。

実際に触れたり、働きかけたり、探索したり、冒険したりという、本来の「自然との関係性」が切れてしまっているんです。

いま、村に時々、クマが出てきたり、イノシシが出て来て、撃ち殺されたりしていますが、殺されるほうにとっては、えらい迷惑です。かつては「里山」という中間地帯があったんです。イノシシやクマも、里山あたりまで来ると、そろそろ人間の領域が近いから「まあ、ここまでで遠慮しよう」と山に戻っていた。いま、かつての里山まで出てきたら、そこは道路になっていく。びっくりするのは熊のほうです。熊にしてみたら、山にはエサが足りないし、仕方なく、ちよつと出て行ったら、そこに人間がいる。それで大騒ぎになって、あげくは殺されてしまう。たいへんな悲劇です。

もちろん、人間のほうだって、丹精込めた畑を荒らされては困りますから、そこは地域のみなさんでよく

話し合って、「どうやって彼らと共存していくか」、その方法を考えていくしかありません。週に1回だけ、山にエサを置いてきたり、どんぐりとか、実のなる木を植えたりしているところもあるようですが、地域で、知恵をしぼっていただきたいと思っています。

とにかく、そういうふうにならぬ、動物たちも虐げられているんです。その一方で、人気の動物園には人がいっぱい集まります。ここでも「見る自然」になっている。もちろん動物園が悪いというわけではありません。動物たちのために、所懸命、尽くしておられる動物園の方々もたくさんおられます。

心の自然な流れを取り戻す

このように、たしかに世の中は便利になり、きれいになり、一見、過ごしよくなりました。しかし、目に見えない本当に大事なものの、大切なものがどんどんなくなってきました。とくに、内的・外的な「自然」との接触がなくなりました。本来、心も身体も自然とつながっているものです。その自然との関係が「キレた」。この

ことが、人の心の自然な流れが「キレて」しまった大きな原因ではないか。私はそう思っています。

そうだとしたら、その自然との絆を取り戻すことが、打開の出発点ではないか。「キレた」絆を「つなぐ」ところから始めるべきではないか。

そう考えて、私は「カワ、ンセラ」になったのです。

「川」は「水の大循環」の道筋

では「なぜ川なのか」。

よく、そう聞かれます。

それは、川だけが地上の最高点——日本で言えば富士山、3776メートル、世界だとエベレスト、チョモランマ、8848メートル。この最高点と、最低点つまり海面とを「つなぐ」ものだからです。降った雨を海につなぐ「水の大循環」の道筋——それが川です。

もちろん、うんと高所で降った雪は氷河となりますが、氷河も水の重みで、ゆっくりと動いています。動くときに、摩擦熱で水が溶け、染み出た水が地面に湧き出てきます。雨は山で地下水となり、滝になり、川

になり、最後には海に注ぐのです。だから、最高点と最低点を「つなぐ」唯一のものが川です。この「つなぐ」というコンセプト(基本概念)がポイントです。

しかも、「水」は生命の根源です。生物も海から生まれたし、人体の70パーセントくらいは水です。地球も「水の惑星」です。ガガーリン少佐がボストーク1号に乗って、人類で初めて地球を宇宙から見えて「地球は青かった」と言いました(1961年)。それも当然で、地球の表面の7割は海です。3割が陸地です。

日本の月探査衛星「かぐや」が、月の表面から地球を撮って、「月の出」ならぬ「地の出」の光景を見せてくれましたね。真っ青の美しい「地の出」です。あの写真は人類の快挙だと思いますが、あのように「地球は青い」のです。「水の惑星」なんです。

この水の惑星である地球で、水を通していている部分はどこかというと、やはり川です。人間と自然を「つなぐ」というときに、川に着目した理由がそこにあります。

しかし、先ほど申し上げたように、いま川を見てみると、あらゆるところで鎖や、杭や、コンクリートで

仕切られています。「立ち入り禁止」と書いてあります。また、川自体も汚染され、整備されすぎて、生態系はあちこちで分断されています。

護岸工事ということが中心になると、川をコンクリートでビタートと遮蔽しやへいしてしまいます。そうすると、何が起ころるか。川沿いの水たまりのような、川の水が出入りする場所を「ワンド(湾処)」といいます。そこに葦などが生え、虫や魚が棲み、生態系が生まれます。それをコンクリートで固めると、「ワンド」も生態系もなくなります。バクテリアが少ない川では、魚も食べものがありません。

川は死にかけています。叫びを上げています。それをどうやって蘇らせるか。

護岸工事やダムを、すべて否定してもはじまりません。現実には、飲料水とか電力とか大きな恩恵を受けているのですから。そういう現状を踏まえたいうえで、それらの恩恵の部分と、自然を回復する努力とを、どう折り合わせていくか。その知恵と実行力が必要なんです。

川で生き生きと輝き始めた子どもたち

「カワンセラー」として、私は、福井県の九頭竜川で、「サクラマス」の稚魚を放流しました。サクラマスの稚魚はヤマメです。「ヤマメ」は「山女魚」と書きます。つまり清流の美女ですね。では、同じ魚がどうして名前が違うのか。ここがミソです。ヤマメには習性がありまして、半分が地元に残り、半分は海へ出ます。オホーツク海あたりまで行って、生き残ったのが戻ってきます。ほとんどは食べられてしまい、戻ってくる確率は1000分の1といわれます。それが7年くらい経って戻ってきたときは、体長3センチもなかった稚魚が70センチくらいになっている。桜の季節に戻ってくるのがサクラマス、サツキの季節に戻ってくるのがサツキマス。土地によって時季が違いますが、自分のふるさとに帰ってくる。

この稚魚7000匹を、地元の漁協の人たちとか、多くの方の協力を得て、九頭竜川に放流しました。幼稚園児も一緒に、はじめ園長さんは心配されていました。ふだん、川に近づかないよう話しているからです。

それで、お話をして、保護者の方にも来てもらうよう
にしました。すると、お母さんだけでなく、お父さん
も来られて、園児の数より多くなりました(笑い)。

私は、園児たちに、この魚は、海へ行ったら、たい
へんな冒険をして、運がよかったら大きくなって帰っ
てくるんだよという話をしました。すると園児たちは、
放流するときに、大声で「帰ってこいよー!」がんばれ
ー!と、もう、きらきら目を輝かせているんですね。
その姿は、すべての人に見てもらいたいほど感動的で
した。

それから、宇治川の放水路で、竹を切り、中に炭や
石ころを入れて、魚の寝床を造りました。産卵床です。
これを小学生とやりました。

あるいは、鉦路川でカヌーをやりました。カヌーと
いうのは無公害ですから。水の流れだけで動いて、一
切のエネルギーを使いません。たったそれだけのこと
で、子どもたちの目は別人のように輝きました。

ここでも当初、園長さんはこの計画に難色をお示し
になりました。その理由は、危険だから。しかし、こ

のイベントの後、みなで絵を描いたときも、子どもた
ちの目は輝き、おしゃべりの声は大きくなり、生き生
きとしている。それを見て、意見をお変えになりました。
「これからは川に連れて行きます!」と、おっしゃいま
した。

しかし、私は、どこでも先生方に申し上げているん
ですが、「川に行くのであれば、きちんと準備をしてく
ださい」と言います。周辺に危険な場所はないか。天気
はどうか。上流の降水量、雲行きも含めて確認して、
また保護者にも来てもらってくださいと。

川との絆を取り戻すといっても、まず「川が危険では
ない」ようにしなければなりません。

自然への「畏怖」と「敬意」をもって

元来、川は大自然の一部です。ときには洪水なり氾
濫^{ちん}なり、猛威をふるうことがあります。思いもよらぬ
ことが起こります。だから、自然への「畏怖」が大事な
んです。自然への恐れ、かしこみ、この態度がなくな
ってきました。自然というのは怖いものだという、根

本主題がちゃんと戻ってこなければだめです。それがあつてはじめて自然と接することが出来るわけです。

畏怖、恐れ、かしこみの中に、それなりの「敬意」とそれなりの「注意」を払って、自分たちなりに適切に対処しなければならぬという義務が生じます。

川の本質、川の性格、川の性質、川の欠点、川の美点、川の弱点、川の問題点、それらをきちつと見すえた上で、観察し、学び、適切な対処が望まれます。

思いつきでやるのではなくて、きちんとした「コンセプト」と「見通し」をもってやってほしいのです。これから1ヵ月、1年、3年、10年先まで考えてやる。なんでもそうです。打ち上げ花火みたいな一発勝負では何も変わりません。しかし、きちつとした見通しをもち、活動を続けていけば、必ず何かが変わります。

私からのささやかな提案です。

みなさん、川に注目しましょう！ もう一度、川との接触を回復しましょう！ いろいろなところで、いろいろな活動を開始してください。

「結論」です。クルマ中心社会の進展と環境破壊と合

理化、情報革命などにより、人々の関係性が寸断されました。内的自然、外的自然との接触がなくなつた。つまり「キレた！」のです。

だから、まず手始めに、川と身体を媒介項にして、接触を取り戻そう、「つなごう！」ということです。「つなごう！」というその姿勢が、このメンタリテイが、このコンセプトが鍵なのです。これが、私のきょうの結論になります。

(やまなか やすひろ／京都大学名誉教授・
浜松大学大学院教授・京都ヘルメス研究所所長)